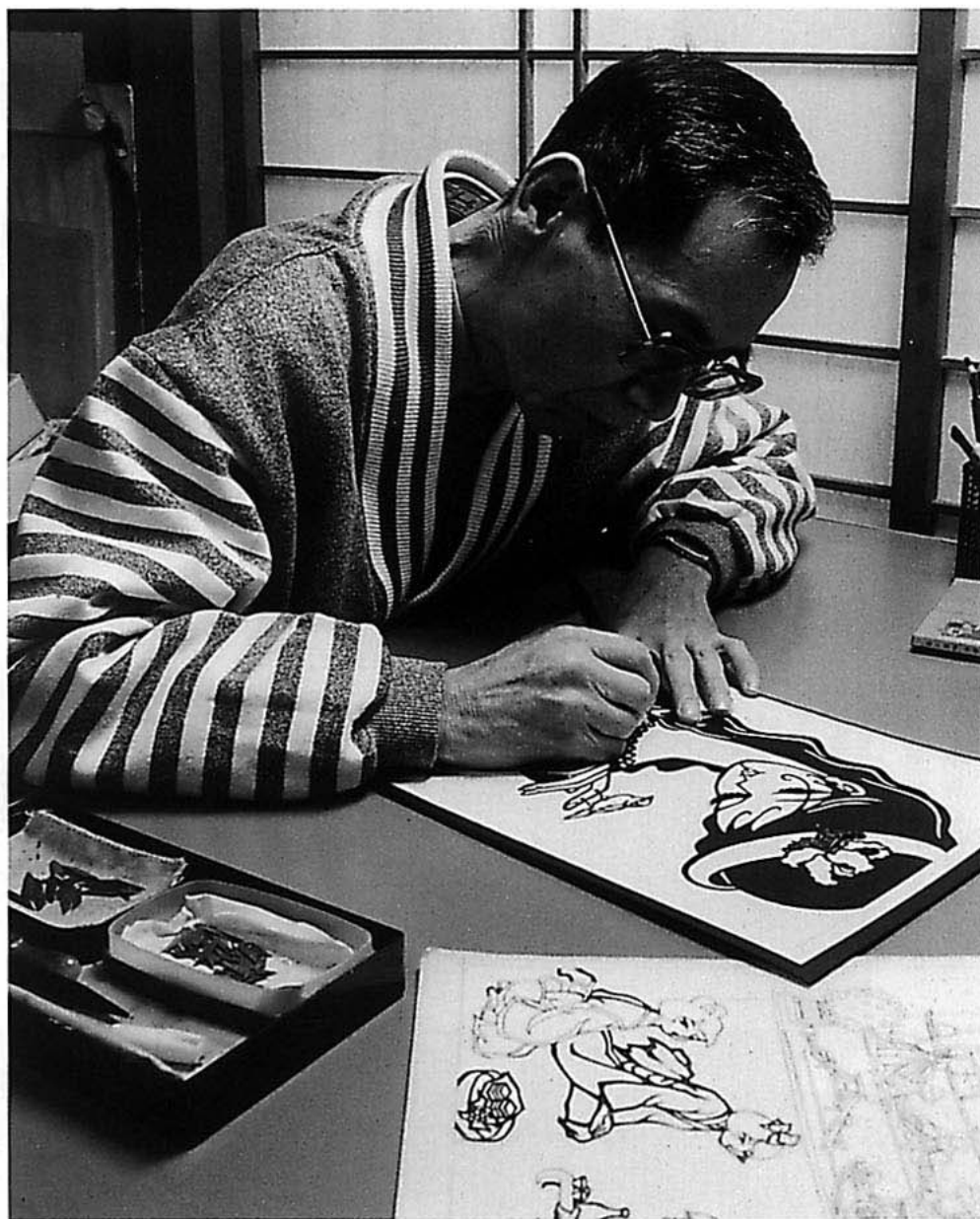


# まちのカルチャー人たち③

## 切り絵で綴る 香芝の物語

Hidekazu YAMAMOTO

山本秀数さん(62歳)



カッターの鋭い切れ味が、極細な線を描いて、黒紙が空間を描くように見えてきます。次第に造形が浮かぶように現れて、それは具体的な形をとり、やがて人の顔が現れました。山本秀数さんの集中した横顔からは、先程まで浮かんでいたほほ笑みが消えてしまい、そこにあるのは、ただ刃先を見つ

める、厳しく光った両の眼でした。「私がこの切り絵にひかれたのは、やり直しのきかない、一発勝負の厳しさ。いわば真剣勝負のスリルのようなものがありますでしょう。それが以前好きだった野球の試合における緊張感につながるからだと思います」

カッターを置いて、こちらを向

いた山本さんはそういうと、またおだやかな笑顔に戻っていました。山本さんが切り絵の世界に取り付かれるようになったのは、五十歳の頃。それまで高校野球の監督などに熱中していたのだが、ふと知った友禅型染から切り絵の魅力を見付だし、その後はただその世界にひたすら邁進の日々だったと

いいいます。何ととっても、切り絵を始めて五カ月で講習会を開いて講師をつとめ、またその一月後には、作品を全大阪切り絵展に出品しているのです。

「そのかわり、睡眠時間は二〜三時間ということもありましたね。なんでも熱中すると、もうすべてを忘れてしまう性格のようです」

現在、山本さんは香芝市の広報紙の表紙を描いていますが、もっと知られている作品に、「たんだの椿」などの香芝の民話を紙芝居にしたものがあります。カラフルな物語構成にした民話の世界が、山本さんの精妙な指先と深い造詣から生まれたといえます。

「この民話では、すいぶん苦労しました。一枚の絵なら、そう難しくはないのですが、何分、ストーリー仕立てですから、いわゆるコンテを作ることからはじめ、また子供たちを随所に描きましたから、その配置も考えて、最初の絵を描き始めるまでが大変でした」

やはり、切り始めるまでの、頭の中の作業が大変なようです。山本さんは、中央公民館で切り絵講座の講師をしているが、これは切り絵の楽しさをもっと知ってほしいから。また、これからは香芝市の理もれた文化財や自然などを描き続けていきたい、だから美しい花の咲く風景や知られざる名所などがあつたら、ぜひとも知らせてほしいとおっしゃる。